

「仏さまのものさし」

富山教区 富山南組 妙行寺 奥野寛暢

この春、長男が小学校に入学しました。早いもので、もう一学期が終わろうとしています。大きなランドセルを、背負っているのやら、背負われているのやらと見ながら、どんな人生を歩むのだろうかと心配しつつも楽しみに思えてきます。

そんなある日、私の連れ合いから、そろそろなにか習い事でもさせたらどうかという提案がありました。一年生から習い事をする必要もないかなと思っていましたので、

「そんなに慌てなくてもいいんじゃないか」

と言ったのですが、周りの子どもたちを見ていると、塾へ通ったり、英会話教室、ソロバン、習字、野球、サッカー、空手、水泳などなど、すでにいろんなことを始めているようなのです。総じて、本人よりも親の方が真剣な様子で、六歳にして人生設計がスタートしているといった雰囲気です。子供の幸せを願い、夢を託して、いくつもの言葉をつなげて名前を付ける落語の「寿限無」の現代版といった感じです。いつの時代にも親は子供になるべく苦勞の少ない、失敗をしない人生を送ってほしいと願うものなのでしょう。

しかし、そんな親の願いとはうらはらに、失敗や挫折を繰り返しながら人間は成長していきます。そう考えると、習い事や学習ばかりでなく、一見無駄に思える遊びの中にも、人生の荒波を越えていくヒントがあるのではないのでしょうか。人を育て指導するという意味では、スポーツの監督をしている方々も親と似たような思いを持たれることが多いと思われまます。

明日はサッカー・ワールドカップの決勝戦ですが、この度の日本代表監督であったA・ザッケローニ氏と、その前の監督である岡田武史氏は、監督をするにあたって、偶然にも共通のキーワードを持っておられたのです。それは、「人間万事塞翁が馬」という言葉です。これは中国の古いことわざで、幸も不幸も予測できるものではないから、いちいち一喜一憂するべきではないという意味です。

この二人の監督は初めからこのような考えを持っていたのではないようです。初めのころは試合中の一つ一つ個々の選手のプレーや、自分の采配の結果に一喜一憂していたそうです。しかし、長い経験の中で、無駄だと思っていた失敗や挫折が、思わぬ結果を導き出し、それらがやがて確実に価値あるものになるということに気付いていかれたのです。その結果、彼らはまったく失敗をしないで進む方法よりも、失敗すらも糧にして進む方法をよし、とされたのです。確かに、あらゆる結果を前向きに捉えて、自分の成長の糧にすることは大切なことで、子どもたちにも教えていかなければならないことの一つだと思います。

しかし一方で、何でもかんでも糧になるという考え方は非常に危ない一面もあることに注意しなければなりません。同じ元日本代表監督のI・オシム氏は、とあるインタビューで、祖国・旧ユーゴスラビアで内戦を経験されたことから、「戦争から学んだこともあったでしょう？」と聞かれた時、彼は、

「そこから何かを学べた意義を認めてしまえば、戦争が必要なものになってしまう。」

と答えられたそうです。

この話を聞いたときに、私は目からウロコが落ちたような気持ちになりました。すべての経験や挫折が自分を育てる糧になると捉えることは大切なことだと考えてきましたが、戦争など、およそ肯定できないものまで認めてしまうことは大きな間違いであるということに気付かされました。

私たちの多くは、自分にとって都合のよいことしか見えない判断基準、そんな「ものさし」しか持っていないように思えます。

しかし、オシム氏のように、自分以外の人間や、大きく全人類の立場から物事をみることのできる「ものさし」を持つことが、子供たちにとって、また、大人にとってもたいへん大切なことなのではないのでしょうか。そして、このような「ものさし」を私たちに与えてくれるのが仏教の教えです。

では、仏様の「ものさし」とは一体何なのでしょう。そのヒントが仏さまのお姿にあります。仏さまのお姿を見ますと、半分閉じた眼をされています。これは、半分閉じた眼で内側にある自分自身の本当の姿を見つめ、半分開いた眼で、外側にあるすべての世界の生きとし生けるいのちの苦しみや悲しみまで自分のものとして見通すためのものだそうです。この内外どちらにも開かれている眼を通して、見たり、考えたりなさるのが仏様の「ものさし」なのです。

よく考えてみますと、私たちの「ものさし」は、自分中心の考えに基づいてはたらいっています。自分をしっかりと見つめる内側の眼は閉じてしまっています。また、周りのことなんかもまったく見えていません。言うなれば「闇」の中にいるのと同じです。

ここでいう闇とは人間の持っている心の闇です。自分のことしか見えなくなり、最後には自分さえ見えなくするので、「闇」と喩えられています。

仏さまの「ものさし」は、そんな私たちの姿を照らし出してくださる光のようなものです。

親鸞聖人は、仏様・阿弥陀仏の願い—すべての生きとし生けるいのちの苦しみを取り除きたいという願い—を聞かせていただき、仏様の「ものさし」で自分と周りの世界を光のように照らしだしていただいたとき、苦しみや禍のもととなっていたものは、実は自分中心の「ものさし」でしか測ろうとしない自分自身であったのだと気付かされるのだと教えてくださっています。つづけて親鸞聖人は、その仏さまの「ものさし」を心にいただいたとき、本当の意味ですべての挫折や失敗が、自分だけでなく、すべてのいのちにとっての糧となっていくのだと示してくださいました。

「解説」

～人生が変わってしまう！「仏様のものさし」～

仏教なんて、お葬式まで縁がない。と思っはいませんか？

聞けば聞くほどに、いろいろなものの見え方が変わってくるのが仏教です。

今回は「ものさし」を喩えに解説していきます。

◆人間の本性

「塞翁が馬」の故事は、幸福や不幸が人間の思い通りになるものではないことを示してくれています。

それでもコントロールしたがるのが人間の本性でしょう。医療の発達、交通機関の発達、挙げればきりがありませんが、地形から時間、人生、生命にいたるまで、なんとか自分の思い通りにしようとしています。

◆失敗、挫折・・・「苦」とは？

思い通りにならないことを「苦」とお釈迦様は教えてくれました。「苦」とは外からの要因と自分の内にある「こだわる心」によって引き起こされます。

失敗や苦悩を他人のせいにしていませんか？

実際には「苦」のほとんどが自分のせいです。

◆なんでもご縁ですか？

仏教を聞いていると、苦しみや禍(わざわい)も自分を世の真理にめざめさせようとしているのだと思えてきます。これをご縁といたり、仏縁といたりします。

しかし、なんでも「ご縁」ですね。と簡単に片付けられればよいのですが、戦争・差別やいじめなどをご縁の一言で肯定してしまっているのではないかと感じられます。

本当は戦争をしたい人や差別、いじめをしている側の人が、自分の恥ずかしい姿を見つめる仏縁とすべきなのでしょう。

◆人間の「ものさし」

人間はそれぞれに判断基準「ものさし」を持っています。それは他人との比べっこによく使われ、基準はだいたい自

分中心です。

この、自分が正しくて、他人は間違ってるという「ものさし」が現在、地球の人口 70 億人分存在するといっただけ間違いはありません。

これでは、世の中はまさに闇の中でしょう。

◆仏さまの「ものさし」

①仏(ぶつ)眼(げん)

『仏説無量寿経』というお経には「五眼(ごげん)」と示してあります。

阿弥陀仏はこのすべてをそなえているといわれます。

- 1、肉眼(にくげん)…実際の色や形を見る眼
- 2、天眼(てんげん)…すべての世界と過去、現在、未来を見通す眼
- 3、法眼(ほうげん)…生きとし生けるものを救うための法を見極める眼
- 4、慧眼(えげん)…真理が皆に平等にはたらいっていることを見抜き、すべてのものの本性をさとり尽くしている眼
- 5、仏眼…上の四つすべてをそなえる眼

ラジオでは、内も外も見極める眼と表現しましたが、現実には起こっている事柄の内外ばかりではなく、すべての真理までも見通しているのが「仏眼」です。これを私たちが体得することは並大抵のことではありません。私たちのできることは、仏さまはどのように見られるだろうかと自分自身に問うていくことです。この問ひかけが「ものさし」を心にいただくということです。

②わざわいの波が転ぜられていく人生

放送の最後は親鸞聖人のお言葉を要約してお伝えしました。

引用した原文は以下のお言葉です。

「しかれば大悲の願船がんせんに乗(じょう)じて
光明こうみょうの広海に浮びぬれば、
至徳しとくの風静かに、
衆禍しゅかの波転ず。…」

『教行信証』

現代語訳

「そこで、阿弥陀仏の本願の大なる慈悲の船に乗り、
念仏の衆生を摂め取る光明の広海に浮かぶと
この上ない功德の風が静かに吹き、
すべてのわざわいの波は転じて治まる。…」

仏眼で見通した阿弥陀仏の「ものさし」は二つのものからできています。

それは、「智慧」と「慈悲」です。

慈悲…すべてのいのちの「苦」を取り除き、その束縛から解き放ちたいという願い

智慧…すべてを明らかにし、「苦」のもと、自分自身の本当の姿を照らし出す光

わざわいが転ぜられるとは、自分にとって都合の悪いことをわざわいだと判断していたのは、自分の「ものさし」が原因だったと気付いてゆくことです。

だから、わざわいが転ぜられる条件が、阿弥陀如来の光＝「ものさし」に出あうこととなっているのです。